

おわりに

研究の成果として、いわゆる“きらりと光る”ものづくり企業（一般的な「製造業」を指さない）、IT 関連企業、及び建設業の3分野わたって、4つの研究論文と総括を示した。

この研究によって、以下のような結論（新たな仮説）を得ることができた。

[1] いわゆる“きらりと光る”ものづくり企業（一般的な「製造業」を指さない）の場合、一人または複数の個人が有する独創性を基盤として、ニッチ市場を捉えて、有意な地位が築かれていることが多いように思われることから、ここで求められている人材とは、「アイデアの提案とその実現によって広く（horizontal）社会貢献型人材」と言えよう。そしてそのような人材を育成していくため、「できる限り、社会の要求を知り、創造性が実現されていく『ものづくりの世界』を、当該組織内に提供し続けることが重視されているものと理解できる。

[2] IT（情報技術）関連企業においては、「個々の使用ツール、あるいは機械の高度活用によって、ビジネスの分野における様々な問題と課題の解決に資する人材が求められている。言い換えれば、提供商品としてのIT機器、あるいはソフトウェアについて、ユーザーの“声なき声”を含めて、より高度な要求や難題に応えていくための、広くて（horizontal）深い（vertical）「問題解決（solution）型、及び提案型（suggestible）」の人材が求められているものと考えられる。

そしてその育成方法としては、解決を求められている個々の問題に対応して、さまざまな技術者が知識と技能を寄せ合わせる場または機会に、若手の人材を参加させていく方法が採られている。

[3] 「建設企業（ここでは主として専門工事企業）においては、施主側から出される高度な要求に応え、あるいは先取りしていく体制と人材が要求されている。これに加えて、このような高度の施工能力をもつ建設業は、国家・自治体を含む施主側からの、ますます高度化される要求に応えるべく、「チーム力」として総合力を発揮していく体制が求められている。これが建設業の特異な性格である。必要な人材育成策としては、この事業の社会的重要性が正しく認識され、そのような人材の同志の“強力な協働”が実現されていく方向での教育が重視されている。

以上の3点の考察結果に加えて、この3点は、いわば上昇スパイラル（upward spiral）として動くことで、人材の高度化が進行しているものと考えられる」という仮説を固めるに至っている。これは本研究開始時には、全く想定していなかったことである、この成果は今後の研究の進化につながるものと思われる。